

「天塩町との出会い」  
地域おこし協力隊、the northをめざして



三國 秀美 (みくに ひでみ)

石狩市出身。北海道大学卒業後、東京のイタリアIT現地法人に勤務のち、科学技術系書籍編集、ITリサーチャー、デザイン・ジャーナリスト活動を行う傍らで東洋医学に出会う。鍼灸あん摩マッサージ指圧師の国家資格を取得後、東京都目黒区にて開業、のちに渡中し天津市のホテルにて施術活動を行うなか、新型コロナウイルス感染症拡大にともない帰国。自宅待機等を経て天塩町の地域おこし協力隊として2021年12月より着任。

【臨床家として自然に触れる】

東京よりUターン移住してきたのは2021年11月30日。「本格的な冬の前か春か……」元道産子らしい選択をし、私の天塩ライフは冬から始まりました。

幻想的な冬を越え、道路のアスファルトが顔を出すと、それまで雪道運転を控えていた私は徐々に北海道巡りのドライブをするようになりました。季節により表情を変える自然は、生き生きと私の目に飛び込んできました。そうした日常のなかで、協力隊からひとたび臨床家の目が変わると、天塩町は漢方資源の宝庫であると実感します。お灸の<sup>きゅう</sup>もぐさに使われるヨモギだけではなく、たくさんの資源をどのように臨床に活かすかを考え、町内外の協力隊、そのOBやさまざまな人と語り合い活動のヒントを得ています。

鍼<sup>はり</sup>と植物という観点では、母校の付属鍼灸院<sup>しんきゅう</sup>研修生時代に「イオン・パンピング」というアプローチに出会いました。ダイオード内蔵のコードで患部と植物をつなぎ、イオンを行き交わせることで痛みを緩和させ

る方法は、北海道に戻ってこなければ思い出すことがなかったかもしれません。ダイオード・コードはもともと多く出回らないため、販売終了になったり再販になったりとその供給は不安定。ドイツでは植物専門の鍼師が存在し、鍼と植物が近い関係であるというのは、都会では忘れがちでした。私自身は、微弱電流やパルス電極を使いながら太極を中心に治療を勧めることが多く、火鍼<sup>かしん</sup>（焼いた鍼を打つ方法）以外で植物に鍼を打つ練習はほとんどしてきませんでした。

春に話をもどすと、さまざまな植物が芽吹き、その生命力を見るにつけ「イオン・パンピング」療法を思い出さずにはいられませんでした。痛みが出るところはプラス・イオンが滞り、それを植物のマイナス・イオンに流すことでゼロにしていくというイメージは、まさにデジタルの二進法に近い概念にたどりつくように感じています。1とゼロの組み合わせとバランス。そのリズムが自然界で有効になるのは極めて興味深いし、これからの臨床に活かしていきたいところです。

また、森そのものに目を向けると、早春の雪解けが始まる頃は地域住民の方からのお誘いで白樺の樹液を採りに出かけ、週末はバードウォッチングで渡り鳥を観察し、そして新学期が始まると高校生の地域学習支援でアカエゾマツのある湿地林の位置を確認するなど森に触れる機会が増し、それとともに春の香りを感じる機会が増えました。五感のなかでも敏感な嗅覚が樹木系のアロマ成分で刺激されると、リラックスだけではなく免疫系の向上も期待できます。森や川のまわりなど息を呑むような美しい自然に触れ自然そのものの香りに包まれる日常は、それだけで癒されます。そして、植物だけではなく動物も森の一部だとすると、運転する車の前を横切るエゾジカ、キタキツネ、そしてヒグマに加えすばしっこく動く小動物たちは、存在全体が環境なのだと感じずにはいられません。こうしたときに臨床家の目になってしまうと、漢方として諸々煎<sup>せん</sup>じてしまいたくなるのですが、そこをこらえて、というのは冗談ですが、共存共生のなかでこの自然を次世代に残すよう生きなければならないと強く感じます。

## 【天塩町との出会い】

数年前に出会った書籍、『光るクラゲ』（青土社）の文中に出てきた「セレンディピティ（偶然の幸運）」という言葉は当時の私に強烈に響きました。私自身、偶然の幸運を追いつつ施術の先を読み、恩師をはじめさまざまな先輩の書籍を読み研修に参加しながら臨床を重ねる毎日が続いていたからです。さらなる偶然の幸運を求めて海外での活動を目指し「国境なき医師団」への応募を進めてもいました。ですが、医療集団ではあるものの、当然東洋医学である鍼灸師枠というのはなく、事務局と相談してロジスティシャン（物資調達）枠で経歴書を作成しましたが、やりとりが続き何度も書き直して挑戦するもパリでの面接に進むことができずへこんでいました。

そんななか、札幌での高校の同窓会帰りに厚真町にふらりと行き、スーパーフードであるハスカップと出会ったこと、その後オファーのあった中国で生きていこうと東京の治療院を閉院し、渡中しながらもなんとか施術業務に慣れた頃に新型コロナウイルス感染の影響で一時帰国を余儀なくされたこと、そのまま就労ビザが保留になり中国には戻れず、大使館やビザセンターに何度も足を運び新たな契約を調整しながら都内の高齢者施設で夜勤アルバイトに就くと、そこで出会って意気投合したおばあちゃんに「たくさん服薬するよりハスカップを摂ってみたら」と勧め、確認のために北海道を調べ始めたら天塩町で「グローバル人材募集」、つまり地域と海外をつなぐ業務もしくは人材を育てる協力隊を募集しているページを見つけワクワクしたこと、数日後に再度サイトを訪れたらたまたま

募集リンクが切れていて直接役場に確認の電話をしたところ、担当者の方とつながり前向きな会話ができたと、そして町関係者との面接が天塩川カヌーの話題で楽しく進み（たまたま私自身はメキシコ遠征に行くほどシーカヤックの仲間に恵まれていました）、間を置かず着任が決まり天塩町に辿り着きました。これが私にとって偶然の幸運の連鎖です。

天塩町の人々とは「ここが痛い、あの人も痛がっている」といった他愛ない会話から施術を通して健康増進に携わる日もあれば、「天塩町の特産品をもっと調べる手伝いをしてください」と小学生と一緒に学習したり、なかば沢を駆け落ちながら山菜を覗きにいったり、原稿を書いている今は秋を迎え、天塩町の歴史を語るうえで不可欠な作物である馬鈴薯<sup>ばれいしょ</sup>について調べるなど、以前の生活を思い出す暇もないほど活動的な毎日が続いています。

東京に住み、パリ、ミラノ、ニューヨークといった国際都市を巡り、それに飽き足らずカナダ、ネパール、モロッコ、コスタリカなどに自然を求めて遠くへ遠くへ旅した自分は、鮭のように北海道へ戻ってきました。石狩川ではなく天塩川と川を変えて。それは、自分の目や手を道具に変えながら、自分なりに人や自然と対話する準備ができたからなのかもしれません。

今はオンラインの鍼灸院「テシオンヌ」を展開していますが、最北端に鍼灸マッサージの分院をつくるなら“the north”という看板にしようかな、と次なる偶然の幸運を妄想しながら明日を楽しみに生活しています。



施術風景

週に1度程度、地域住民対象に施術体験会を行っている。なかには「母にお灸を」と息子さんがシルバーカーを支え付き添って訪れることもある。「楽になった。それでね」の声から天塩を学ぶ。



高大連携支援

「え？何？フィットンチッドって」  
筑波大学生とのグループワーク支援では逆に天塩高校生から教わることも。